

お笑い芸人になつた最愛の彼女が
先輩ゲス芸人に
恐ろしいセクハラをされる話

犬文庫 030

この作品はフィクションです。

実在の人物・団体・事件等とは関係ありません。
作品内で描かれるお笑い業界も架空のもので、
実際のものとは一切関係がありません。
また、登場人物は全員十八歳以上です。

登場人物

桃花 新人お笑い芸人。漫才コンビのツッコミ担当。背が高く、女の子にしては立派な体格で大きな体。黒髪三つ編みツインテールの地味な清楚系女子。正統派漫才で老若男女を楽しませる芸人を目指している。

陸斗 桃花の彼氏。大学生。お笑い芸人の彼女を誰よりも応援している。

ミキ 桃花の相方。ボケ担当。短い黒髪。チビでデブで眼鏡のブスキャラ。

野島 人気破天荒コンビ××××××××のツッコミ担当。長めの茶髪と細い目、大き

な鼻。お調子者。関西弁。

城田

人気破天荒コンビ××××××のボケ担当。厳つい強面イケメン。クールで怖そうな雰囲気。関西弁。

山本

桃花の先輩女芸人。田嶋の相方。ボケ担当。東京出身。短い中性的な黒髪。ピアスとタトゥーがトレードマークのロック系女子。男に一切媚びないワイルドな芸風で、桃花の憧れの存在。

田嶋

桃花の先輩女芸人。山本の相方。ツッコミ担当。大阪出身。茶髪のソバージュヘアのヤンキー系。山本同様今時のカットコイイ女芸人。

『いや私ね、こんなチビでデブでブスで眼鏡でしよ？お察しの通り、もう全然モテないんですよ』

『そんなことないでしょう。ミキちゃん、可愛くて素敵じゃないですか、ねえ、皆さん？』

『いやいや、桃花(ももか)ちゃんは自分が可愛いからそんな風に言えるんですよ。私は本当にモテないの。もう、ほんっつっとうに死ぬほどモテないの！モテナさすぎて、ふと気絶しそうになることもあるくらいなんだから！』

『なにもそこまで言わなくてもいいじゃないですか！』

「…ふふっ」

スマホから流れる漫才の動画に、僕は思わず笑いをこぼす。僕の部屋。隣には彼女。二人仲良く寄り添って、お笑いの動画を見る。恋人同

士のお家デートの、よくある一幕だろう。だが、僕達の場合は少々事情が異なった。

有名動画サイトにアップされたその動画の中で漫才を披露する女性コンビの内の一人が、今、僕の隣にいる彼女に他ならないのだから。

「あはは…ふふ…」

「……ゴクッ」

楽しい気分で漫才を鑑賞する僕の隣で、彼女の桃花は真剣な眼差しで固唾を吞んでいた。程なくしてその動画は終了した。お笑い事務所の公式チャンネル内の動画で、お客さんのいないこじんまりとしたスタジオで撮影されたもの。再生回数はまだ全然で、コメントも一つもついていなかった。

「ど…どうだった、陸斗(りくと)くん?」

「うん、面白かったよ!すごいよ、桃花ちゃん!」

「えっ、ホント？よかったあ〜」

僕の反応に、桃花はすこぶる安堵したよう
で表情を大きく崩した。僕はお笑いの専門家では
ないので詳しくはわからないが、普通にすごく
笑えたし、テレビで見る有名なコンビの人達の
漫才とそんなに遜色ないと思えた。なによりも、
漫才という素人には真似出来ない芸を、他なら
ぬ僕の彼女が堂々披露していることが感動だ
った。素直にすごいと思った。

僕と桃花は高校時代の同級生で、当時から付
き合っていた。卒業後、僕は大学に進学し、桃
花はお笑い芸人の養成所に入った。桃花との甘
いキャンパスライフを夢想していた僕は、お笑
い芸人を目指すという彼女に最初は戸惑った
ものの、すぐに応援しようと思った。現在、桃
花は養成所を出てプロの芸人一年生。僕が大学
二年生だ。

黒髪の三つ編みツインテールで、背が高く大柄ではあるが地味な清楚女子の桃花は、とてもお笑い芸人とは思えないような女の子だった。童顔で垢抜けていない感はあるものの、顔立ち
は非常に整った美少女系。性格も優しくピュアで、芸人的なガツガツした品のなさはまるでない。服装も少女趣味の幼げな可愛らしいものを好んで着ていた。相方のミキちゃんが、ネタで本人も言っていたようにチビでデブで眼鏡のブスキャラで、見るからに女芸人といった風貌をしているので、余計にそう見えるのかもしれない。

だが、桃花のお笑いにかける熱い思いは紛れもない本物だ。彼女は笑いで老若男女たくさんの人を幸せにしたいという素敵な夢を僕に真剣に聞かせてくれた。自分のためではなく、誰かのためにといいところに、彼女の性格が現れ

ていると思った。そして下品なイロモノの笑いではなく、正統派しゃべくり漫才で楽しませたいというところも、真面目な桃花らしくて好きだった。

お笑い芸人の道はきつと、僕が想像も出来ないほどに過酷なのだろう。けれど僕はこれから先ずつと、芸人桃花の一番のファンであり、彼氏としても彼女を支え続けようと心に決めていた。

「どう、どう？陸斗くん？陸斗くんの目から見て、どこか直すところとかなないかな？遠慮なく教えてよ。ね？ね？」

メモとシャーペンを手勢に勢い込んで訊いてくる桃花。素人の僕にも謙虚に意見を求めるところが、素直な彼女らしい。

「うーん。特にそういうのはないかな？僕から見れば完璧だったと思うよ。桃花ちゃんのツツ

コミもキレイキレイで、すんごく気持ち良いし。最高に面白かったよ」

「ホント？嬉しい！どうしよう！」

いきなり腕をバタバタさせて全身で喜びを表現する桃花。彼女は背が高く、がっしり気味で肩幅広く肉付きもよかったが、そういった大きめの体型の彼女がこんな風は無邪気に女の子らしい仕草を取るのがまた可愛いのだ。彼氏としてはニンマリするしかない。

「：よおし：じゃあこのネタ、このままぶつけてみようかな：」

「え？」

桃花の口からこぼれた言葉が気になり、僕は訊き返した。

「ふふふ：実はね、今度同じ事務所の××××××××××っていう先輩コンビさんにね、ネタ見てもらえることになったんだあ」

「へっ！すごいじゃん！」

それは、お笑いに詳しくない僕でも知っている有名コンビだった。お調子者のツッコミと、敵ついボケの関西弁男性コンビ。深夜にテレビで冠番組も持っているほどの人気者で、桃花が所属する事務所で一番売れているのではないだろうか。

「うん。だからこのネタでちよつと頑張ってみるよ：もし気に入ってもらえたら、番組に出させてもらえるなんてことも、あるかもしれないし」

「おおっ！もしそうならホントにすごいね、テレビだなんて！頑張れ桃花ちゃん！」

あまりのことに興奮して、僕はつい大きな声を出してしまう。だが、それに反して、桃花は急に冴えない表情を浮かべたのだった。

「うん：でも：：：実はちよつと：：：怖いん：

「だけどね…えへへ」

そうして無理に笑顔を作ってみせる。

「桃花ちゃん…」

僕には彼女の心理がよくわかった。件の先輩コンビは、過激な言動や破天荒なネタが売りの、なんとというかちよつと悪そうなコンビなのだ。少し前まで高校生だった普通の女の子桃花が、ビビッてしまったって仕方ない。

また、桃花は高校時代から正統派の漫才コンビばかりが好きで、僕に度々薦めてきたのもそういう達人たちの練り上げられたネタ動画が大半だった。笑いの嗜好的にも、その先輩コンビは桃花の趣味からは外れているのかもしれない。

だが、だからといって逃げているはいけない。そんなことくらいで怯んでいては、彼女が志す大きなものへは到底辿り着けないだろう。

僕は愛する彼女にアドバイスを送る。

「…大丈夫だよ、桃花ちゃん。きつと大丈夫。上手くいくよ。それに、芸人の世界は上下関係が大切なんだよね？先輩に怖がってたりしたら、失礼に当たっちゃうよ。…ちゃんとしなきゃね」

「…う…うん。…そうだよね。私、頑張るよ。」

…ありがとう、陸斗くん」

「うん…」

（頑張れ、桃花！）

僕は夢に向かって真っ直ぐにひた走る彼女を、心から応援していた…。

※※※

「あゝ。緊張する。やっべえゝ」

「うん：そうだよね：はあ：」

午後十時すぎ。新人お笑いコンビであるミキと桃花は、ファストフード店のテーブルで向かい合っていた。三つ編みツインテールの桃花は可愛らしいデニムのオーバーオール姿。飾り気のないショートヘアと眼鏡のミキも、茶っぽい色のダサイトップスとジーンズで、二人とも全体的に地味な出で立ちだった。どちらも元々クラスでも目立つようなタイプではなく、彼女達がお笑い芸人だといっても、誰も信じてくれないかもしれない。

養成所で知り合った二人は、すぐに意気投合してコンビ結成。その後数々の難関をパスして、先頃事務所に正式に所属することが出来た。実はこれだけでも相当すごいことなのだ。養成所には多くの芸人志望の若者がいたが、ここまで

来れたのは彼女達を含めて数えるほどしかない。厳しいサバイバルレースを勝ち残り、二人はプロの芸人としてスタートを切ったばかりだった。

二人のネタは、チビでデブでブスという見た目のミキのコンプレックス溢れるボケに、桃花が鋭くツッコむ正統派しゃべくり漫才。二人とも、イロモノやヨゴレのような飛び道具的笑いを嫌い、漫才でしつかりとした評価を得たいと切に望んでいた。

「はあ…一応、もう一回合わせとく、桃花ちゃん？」

「ああ…うん…そうだね、ミキちゃん。念のため…ゴクツ」

「うん…はいども。よろしくお願いしまあす」

「…よろしくお願いしまあす」

ガチガチに緊張した様子の二人は、椅子に座って対面したまま小声で漫才を合わせ始めた。何故彼女達がここまでテンパっているかというのと、この後××××××××という事務所の先輩である有名コンビに、直接ネタを見てもらう予定になっているからだだった。深夜のテレビで冠番組を持つほどの超売れっ子の大先輩でも、し気に入ってもらえれば番組に出させてもらえるなんてこともあるかもしれない。新人の二人にとっては千載一遇のチャンスである。舞い上がってしまうのも当然だった。

「お待たせ」

「遅うなっつてもたな、ごめんやで」

「あっ、おはようございます！」

「おはようございます！」

いきなり目の前に現れた二人の女性に、桃花とミキは漫才を中断して慌てて立ち上がり、礼

儀正しく挨拶しながら深々と頭を下げた。彼女達も同じ事務所の先輩女性コンビで、それぞれ山本と田嶋といった。ボケ担当の東京出身山本は、短く切った黒髪が特徴的ないわゆるロック系の女性。耳にはピアス。首元にはタトゥー。丈の短いへそ出しのシャツと革のショートパンツで、今日もビシッと決めていた。

一方ツツコミ担当の大阪出身田嶋は、茶髪ロングのソバージュヘアのヤンキー系。スカジャンとジーンズという女っ気のないファッションからも、そのキャラクターが色濃く出ている。

二人は見た目のイメージ通り、男に全く媚びないワイルドな芸風の女コンビだった。女性としてのカッコ良さがとても現代的で、ミキと桃花の憧れの存在といえた。いや、最早お笑いを志す多くの女性が、男に頼らない二人の女芸人

××は多忙にも関わらず、ミキと桃花のためだけに今回のネタ見せの席を用意してくれたのだった。それだけでも、もう震え上がるほどの光栄で、ありがたすぎる話である。絶対に感謝を忘れてはならない。

だが、そういった分不相応な立場であっても、正直後ろ向きな気持ちが全くないわけではなかった。コンビ二人の気持ちを代弁するように、ミキが言う。

「あ、あの…ちよつといいですか…」

「ん？どうしたん、ミキちゃん？」

「はい…その…こういう機会を設けて頂いて…今日は本当にありがたいです…私達のような新人コンビに…でも…その…なんか…正直言うと少し…怖いといえますか…あの…失礼かもしれないんですけど…××××××××××さんって…その…テレビで見る限り…ちよつ

と怖そうな印象があつて：だ：大丈夫かなあ
ゝつて：なんか：い：いきなり怒られたりし
ないかなうとか：ああ！ホント失礼だとは思
うんですけど！こんな機会頂いておいて！で
も：正直：少しそういう不安が：少しあると
いますか：」

ミキの言葉に、隣で相方の桃花も頷いていた。
××××××××というコンビの破天荒な芸風
と、厳つすぎる雰囲気がつい最近まで普通の
女の子でしかなかった二人に二の足を踏ませ
ているのだつた。

本来は先輩に対してこんな風に言うのは芸
人としてご法度に違いない。だが、心から信頼
している同性の山本と田嶋を前に、つい女子の
本音がこぼれてしまったというところだろう。

「あはは！そんなん気にせんでええよ！野島
さんも城田さんも、めっちゃええ人やし！まあ

ちよつと怖いかもしれへんけど、そんなビビるようなことはないって！」

ヤンキー女子田嶋は笑いながらそう言ってくれた。

「そうそう。最初はとっつきにくいと思うけど、直に慣れるよ。あたしも初めはビビってたけど、今ではもうほとんどタメ口だからさ。そんな気負うことは全然ないよ」

ロック女子山本も、そんな風に二人を勇気づけてくれる。心から慕う先輩女芸人にそんな風に言ってもらえるだけで、ミキも桃花も随分気持ちが楽になるのだった。

だが、田嶋は続けてこんなことも言った。

「でも……まあ……二人とも……芸人……芸人やからな……男の」

「え……」

「多少はほら……そういうことも……まあ……我慢

せなあかんとこもあるかな〜：多少：多少や
で：特に：野島さんとか：めっちゃスケベや
し！あはは！」

「こら、田嶋。二人をビビらせてどうすんだよ。

：大丈夫、大丈夫。そんな気にするほどのこと
じゃないから」

「……ゴクッ」

桃花は思わず、唾を飲み込んだ。田嶋が言わ
んとしていることはよくわかった。元々お笑い
マニアでもあったため、芸人の世界の裏側のそ
ういふ感じは、桃花もそれとなく理解している
つもりだ。

だが、昨今の世間的な風潮の影響もあって、
そういった前時代的男社会的な良からぬもの
は、大分なくなってきたとも聞く。だから
きつと二人も言うように、多少はそういうのも
残っている、程度のことなのだろう。普通に考

えて、特殊なお笑いの世界といえども、あまりに非常識なことはもうないはずだ。

少しくらいなら、後輩として、芸人として、我慢しなければならぬ。桃花もミキも、その覚悟は出来ていた。二人は腹を決めて、×××××××の待つ場所へと出発した。

(…よし。頑張ってくるね、陸斗くん…)

桃花は誰よりも応援してくれている優しい彼氏の顔を思い浮かべた。彼のためにも、今日は是が非でも結果を残さねばならない。

女芸人の先輩に先導され、ミキと桃花はタクシーに乗り込んだ。やがて辿り着いたのは、繁華街の外れにある高級バーだった。シックな雰囲気の見るからに高そうなお店で、アルバイトでなんとか生計を立てる二人には当然触れたことのない空間だった。やはり人気売れっ子芸人は住む世界が違う。そんな風に嘆息せざるを

えない。そして四人は店の奥にあるVIPルーム的な個室へと通された。

十五畳ほどの広いスペース。薄暗い照明の下にテーブルが置かれ、その前にやはり高級そうなソファ。そこに、二人の男性が並んで腰掛けていた。人気コンビ××××××××の、野島と城田だった。

ツツコミ担当のお調子者キャラ野島は、男にしては長めの髪を派手な茶色に染めていた。はつきりブサイクとってしまつては失礼だが、細い目と大きな鼻がアンバランスで、お世辞にもイケメンとは言い難いだろう。

一方ボケ担当の強面城田は、黒髪短髪で彫りの深い外国人のような顔つきをした男前だった。ただ目つきが悪く見るからに厳つい感じで、シュツとしているが怖いという印象の方が先行するかもしれない。

「おはようございます。例の二人連れてきました」

前に行く田嶋が、まず言ってくれた。

「あいよ」

と、城田。

「っていうか遅いで、自分ら。俺らこの後ファンの子らとコンパやねんから、早くしてもらわんと」

と、野島。

「すみませんでした。：ほら、自己紹介して」

田嶋に促され、ミキと桃花は一步前が出る。広い個室の、ソファーに座る××××××××××からは少し距離を置いた位置に立ったまま、二人は恭しく自己紹介する。

「おはようございます！はじめまして。ポケ担当のミキです。よろしくお願いします！」

「おはようございます！ツツコミ担当の桃花

です。本日はこのような機会を設けてくださり、本当にありがとうございます！」

力強く言い放ち、二人は並んでこれでもかというほどに深々と頭を下げた。この流れは、セリフも含めて二人で事前に話し合って決めたものだった。大先輩に失礼があってはいけないと、それなりに真剣に考えてのことだった。

だが、二人が再び顔を上げた時に待っていたのは。

「いや、ボケの方の子。お前、ぶっさいくやなあ。なんかガツカリやわ。可愛いタレ期待しとったのに」

そんなデリカシーの欠片もない、お調子者のツッコミ野島の言葉だった。彼はさらに続ける。「いや、ブス。めっちゃブスやんけ、お前！しかもクソデブやし。ん？でもこのブス、どっかで見たことあるような…まあ、ええか。…お、

でもツツコミの方は結構可愛いやん」

「…そうか？…そいつもブスやろ。なんか垢抜けへん田舎のブス女って感じで。…三つ編みでクソダサイし…ほんでなんかデカイし…服も今時オーバーオールって…野島、お前相変わらずブス専やな」

強面のボケ城田も似たような辛辣な言葉を並べる…。

「そんなことないって。こいつがブスやったら世の中ブスばかりやぞ。こいつは可愛いわ。おいお前。ツツコミの方。可愛い方のお前や。お前、乳なんぼあんねん？」

「え…」

二人の言葉に唾然としているところに、いきなり野島に話を振られ、桃花は戸惑い硬直してしまう。

「乳や乳。おっぱいのサイズなんぼあんねん？」

お前のバストは何センチなんや？おい聞いて
んのか。先輩が訊いてんねんぞ。はよ答えんか
い」

「……………」

思考停止したみたいに固まるばかりの桃花
を、田嶋が隣から肘で小突く。

「あっ…そ…その…きゅ…93…センチ…で
す…」

桃花はハツとして、ともかく、正直にそう答
えていた…。

「おおっ！めっちゃデカパイやんけ！クソデ
カばいおつやんけ！カップは？カップはなん
ぼやねん？答えろ」

「はあ…その…あの…じ…Gカップです…」

「おほほっ！ええやん。一番揉みごたえありそ
うな乳や！こら楽しみやわ！」

「……………」

「くく。まあセクハラはその辺にしとけや、野島。おら、ネタやるんやったら見てやるからはよやれや」

「おお、そうやった、そうやった。俺らもこの後ファンのタレ、カキに行かなあかんからな。はよしてもらわんと。おら、とつとと始めろや」

急に催促され、あまりの状況に呆然としていたミキも桃花も我に返る。色々思うところはあったが、それらはひとまず置いておいて、今はこの売れっ子先輩芸人に、ネタを見てもらわねばならない。コンビの気持ちは一つだった。二人は目を見合わせて互いに頷き合い、ソファーの××××××××××とは少し距離のあるその場に立ったまま、練習を重ねてきた漫才を披露する。

「じゃあ…よろしくお願いします！」

「お願いします！」

「…はい、どお〜も。よろしくお願いしまあ〜す！」

「よろしくお願いしまあ〜す！」

「いや私ね、こんなチビでデブでブスで眼鏡でしよ？お察しの通り、もう全然モテないんですよ」

「そんなことないでしょう。ミキちゃん、可愛くて素敵じゃないですか、ねえ、皆さん？」

「いやいや、桃花ちゃんは自分が可愛いからそんな風に言えるんですよ。私は本当にモテないの。もう、ほんつつつとうに死ぬほどモテないの！モテなさすぎて、ふと気絶しそうになることもあるくらいなんだから！」

「なにもそこまで言わなくてもいいじゃないですか！」

「だから私ね、もう人間の男は諦めて、森に行つて熊と付き合い合おうかと思ってね。熊！熊さ

ん！愛しの熊さん！」

「いやメルヘンすぎるでしょ！戻ってきてください！人間の世界に戻ってきてください！」

「……………」

「……………」

桃花の彼氏、陸斗も絶賛してくれた自慢のネタを、順調に進めていく。ソファァーに身を沈めた××××××の二人は、テーブルに置かれた酒に口をつけながらではあるが、真剣な眼差しで見られているようだった。桃花達の気分も、次第に乗ってくる。

だが。

「ああ、ええわ、ええわ。もうそこまででええやめろ」

とても不機嫌そうな声で、野島が言い放ったのだった。

「あ…ありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

途中で止められてしまったのは極めて不本意だったが、なんとか気持ちを保ち、後輩の礼儀として、感謝を述べながら二人は頭を下げた。

××××××××は言う。

「いや、おもんない！全然おもんないで、自分ら！いや洒落にならんくらいおもんないって、マジで！そんなんでよう事務所入れたよなあ！」

「ああ：話にならんな」

野島も城田も、二人のネタに失望して、怒りさえ覚えているようだった。そこに芸人としての本気の感情を少なからず読み取れたので、ミキも桃花も、恐縮して小さくなるしかない。

「：すみません」

「すみませんでした：はあ：」

野島は心底呆れ果てた様子で言う。

「いや、ホンマホンマ。こんなしょーもないネタ見せられるために時間取られたなんてたまったもんやないで。俺らクソ忙しいんやから」

「……………」

「……………」

「…でもなあ…まあ…数いる芸人の中でわざわざ俺らのとこ選んでネタ見せに来てくれたわけやし、せっかくやしそのネタおもしろしてやりたいなあ…どうや、お前ら。アドバイス欲しいか？」

野島のその問いに。

「はい！アドバイス頂きたいです！」

「お願いします！」

二人は勢い込んで即答していた。コンビの気持ちは一つだった。

すると。

「そうか、わかった。…うーん。そうやなあ…

どうやったらおもしろなるやろ……ふくむ……そ
うや！ええこと思いついたで！お前ら、服脱い
で、全裸で今のネタやってみい」

野島はそんなことを言ったのだった。

「……え？」

「……は？」

当然、二人はアホのようにきよとんとしてし
まう。

「聞こえへんかったか？全裸や、全裸。今着て
るその服脱いで、全部脱いで、すっぽんぽんで
今の漫才披露するんや。ほらやってみい。服脱
いで、今ここでやってみい」

「………」

「………」

耳を疑う野島の言葉に、ミキと桃花は絶句し
て立ち尽くすしかない。だが彼のその口調は、
至って真剣なのだった。後輩を驚かせる類のボ

ケのような感じではない。

「くくく…野島おもろ。初対面の後輩になんち
ゆうことさせんねん。ふはは」

「おらおら、ブーツと突っ立ってんと、はよ脱
がんかい！はよすっぽんぽんになって乳もオ
メコも見せんかい！そんなたいしたもんやあ
らへんやろ！そんで素っ裸で漫才するんや！
おら、先輩がアドバイスしたってんねんぞ！お
前ら先輩の言うことが聞けへんのか？ええ？」

「いや…そ…その…」

「そんな…そ…そういうことは…その…で…
…出来ないです…」

絞り出すような細かい声で、ミキがなんとか
言ってくれた。勿論、桃花も相方と同意見だっ
た。

「なんやと！先輩の命令が聞けへんっちゆう
んか！マジどうなっとなねん、こいつら！あり

えへんやろ！まったく、最近の若手はホンマ芸人の世界の仕来りってもんをわかってへんから困るで！…まあええわ…おい！山本！田嶋！」

野島は不服そうな様子で毒づきながら、話を先輩女性コンビに振った。ミキと桃花は、彼女達に助けを求めたい心境だった。いかに上下関係が絶対的な芸人の世界といえども、今の野島の言動は度を過ぎてている。断じて男に媚びない芸風の山本と田嶋なら、女性芸人の代弁者として、先輩に抗議してくれるはず。そう思ったのだ。

だが、野島は言ったのだった。

「お前ら、このアホの後輩に見本みせたれ。お前らが服脱いで、すっぽんぽんになってネタやれ」

「……くっ」

自分達だけならまだしも、心から尊敬する二

人に対しての失礼千万な要求……。あつてはならないことなのかもしれないが、桃花はこの大先輩に対して、正直怒りを禁じ得なかった。
だが。

「はあ〜〜い♥」

と、山本。

「おっけえ〜♥すぐ脱ぎまっせえ〜♥」
と、田嶋。

今時の、カッコイイ女芸人の代表ともいうべき二人は、男に甘えるような甲高い声色でそう答えたのだった。

そして、なんの迷いも見られないスムーズな動作で、その場で服を脱ぎ始める……。

「!!!!」

「!!!!」

「ぎゃははは！ええやんけ！さすがやな！こいつらは芸人の世界の上下関係っちゅうもん